

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 中国人日本語学習者の「第三者ほめ」の使用実態：接触場面の友人同士の自然談話の分析 |
| Author(s) | 張, 晨; 楊, 雪; 永田, 良太 |
| Citation | 広島大学日本語教育研究, 34 : 15 - 20 |
| Issue Date | 2024-03-31 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/55087 |
| URL | https://doi.org/10.15027/55087 |
| Right | Copyright (c) 2024 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム |
| Relation | |



中国人日本語学習者の「第三者ほめ」の使用実態

—接触場面の友人同士の自然談話の分析—

張 農・楊 雪・永田良太

The Usage of Compliments to Third-party by Chinese Learners of Japanese:
Based on Natural Conversations between Friends in Contact Situations

Chen ZHANG, Xue YANG, Ryota NAGATA

キーワード：中国人日本語学習者，第三者ほめ，ほめ合い，日中接触場面

1. はじめに

「ほめ」は相手から認められたいという聞き手のポジティブ・フェイスを満たす発話行為であり (Brown & Levinson, 1987), 聞き手との連帯感を構築・強化する機能を持つ (Wolfson, 1983)。他方, 親疎関係, 上下関係や「ほめ」の対象によっては, 「ほめ」によって聞き手のネガティブ・フェイスが脅かされ, 連帯感が損なわれることもある。

日本語の「ほめ」に関しては, これまで日本語母語場面や日中接触場面における「ほめ」について, 表現レベルの特徴や談話レベルの特徴に関する分析が多く行われてきた。そこで明らかにされてきたように, 「ほめ」には, 聞き手に直接関係する「対者ほめ」に加えて, 聞き手に直接関係せず, その場に存在しない人物や物事に対する「第三者ほめ」もある (古川, 2000, 2002)。聞き手の所持物や性格等に言及する「対者ほめ」とは異なり, 「第三者ほめ」は聞き手に直接言及するものではないため, これまで「ほめ」の周辺的な存在としてみなされることが多かったように思われる。

しかし, 日本語母語話者は初対面の相手との会話においては「第三者ほめ」を相互に行う「ほめ合い」が見られることが多く, それによって相手と価値観の共通性を確認するとともに, 次にどのような話題を展開すべきかを認識している (永田, 2014)。すなわち, 「第三者ほめ」は日本語の初対面会話において連帯感の構築・強化や談話展開の促進といった機能を果たしていると言える。一方, 日中の初対面の接触場面において, 中国人日本語学習者には, 日本語母語話者が「第三者ほめ」を行っても, 当該対象に関する「ほめ合い」を構

築する発話が見られないことが指摘されている (永田, 2016)。中国人日本語学習者のこのような使用実態には, 初対面の場面における共通の背景知識の不足も原因として考えられる。では, 日中の友人同士の会話においても同様の使用傾向が見られるのであろうか。中国人日本語学習者による「第三者ほめ」の使用実態を明らかにするためには, 対人関係要素に関して, さらに検証する必要がある。

そこで, 本研究では, 友人同士の接触場面における第三者に関する「ほめ合い」の成立及び不成立の談話を分析し, 日本語母語話者と比較することによって, 中国人日本語学習者の使用実態を明らかにする。

2. 先行研究

Holmes (1986, 1988) では, 「ほめ」は話し手が自分以外の誰か (通常の場合, 聞き手) に対して, 話し手と聞き手の両方によって「よい」と認められるもの (所持物, 性格や能力等) に関して, 明示的あるいは暗示的に肯定的評価を与える発話行為であると定義されている。また, 聞き手以外の第三者がほめられる場合, 聞き手の家族といった聞き手に関わりのあるものへの「ほめ」は, 聞き手への「ほめ」とみなされている。一方, 「A: (あるニュース番組の新しいアナウンサーについて) でも, 彼女の声って素敵だと思わない。—B: 確かにそうね。」のような聞き手に関わらない第三者への「ほめ」は単なる「肯定的評価」として分析対象としての「ほめ」から除外されている。

それをふまえ, 古川 (2000, 2002) は, 「ほめ」は必ずしも話し手と聞き手の両方の価値観によって行われるものではないと指摘し, 「ほめ」は, 話し手が「ほめ

の対象に価値づけをすることにより、「ほめ」の対象や対象に関わりのある人／物／ことの価値を上げる発話行為であると定義している。そして、「第三者ほめ」と「対者ほめ」の区別に関して、「第三者ほめ」は話し手の価値観に基づく「肯定的評価」に含まれる点で「対者ほめ」と同様であるが、①話し手と聞き手に共通のもの、②話し手と聞き手に関わらないもの、③話し手に関わるもの、④一般的なことから、がほめられ得る点で、聞き手に関わるもののみがほめられる「対者ほめ」とは異なると述べている。また、新聞や雑誌等の書き言葉データから抽出された「ほめ」の中で、「第三者ほめ」が1割ほどを占めており、「ほめ」に関する研究において無視できるものではないという。

書き言葉データを用いた古川（2000, 2002）とは異なり、永田（2014, 2016）、Kusumawati（2023）は話し言葉データ（自由会話）を分析資料として、「第三者ほめ」について談話レベルで分析を行っている。永田（2014）では、談話の話題が参加者に関わるものと参加者に関わらないものに分けられており、参加者に関わらない話題における「第三者ほめ」には、初対面の日本語母語話者による「ほめ合い」が多く見られると述べられている。また、Kusumawati（2023）でも、インドネシア語母語話者との比較を通して、日本語母語話者には「第三者ほめ」と第三者に関する「ほめ合い」がより多く行われるという永田（2014）と同様の結果が明らかにされている。

中国人日本語学習者の使用実態に関して、永田（2016）によれば、初対面の日中接触談話における参加者に関わらない話題では、日本語母語話者に同調して第三者に関する「ほめ合い」を成立させるような発話が見られない。そのような「ほめ合い」の不成立は、談話展開や連帯感の構築に影響を及ぼす可能性が懸念されるという。

以上のように、これまでの先行研究では、「第三者ほめ」の定義やほめられる対象の分類が行われてきた。分析資料に関して、書き言葉のデータに加えて、近年においては話し言葉の自由談話における「第三者ほめ」に関する分析も行われている。ただし、これらの研究ではいずれも初対面の関係に焦点が当てられており、友人同士の会話で「第三者ほめ」や「ほめ合い」がどのように行われるかに関しては不明である。初対面か友人関係かの違いは、両者が有する共通知識の違いにも関わる。永田（2014, 2016）で「第三者ほめ」として抽出されたのは、古川（2000, 2002）による分類の②「話し手と聞き手に関わらないもの」のみであるが、

友人同士では、参加者は一定の共通知識を共有していることから、①「話し手と聞き手に共通のもの」や③「話し手に関わるもの」が「第三者ほめ」の対象になることも考えられる。

また、先に述べたように、永田（2016）では中国人日本語学習者には「第三者ほめ」に関する「ほめ合い」を成立させるような発話が見られないことが指摘されているが、抽出された「第三者ほめ」が少ないため、その談話展開については十分に考察されていない。

これらをふまえ、本研究では、友人同士の接触場面における「第三者ほめ」の談話を取り上げ、第三者に関する「ほめ合い」がどのような展開を経て成立しているか、成立していないかについて分析する。そして、永田（2016）による初対面の接触場面の結果と比較しつつ、中国人日本語学習者の「第三者ほめ」の使用実態を明らかにすることを目的とする。

3. 分析資料

本研究で分析に用いるデータは、『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』（宇佐美監修, 2023）に収録されている「22. 中国人学習者（初級, 上級）と日本人の同性友人同士雑談（女女）」と、「27. 日本人と学習者（中国, 台湾, 韓国, ネパール, ベトナム）の初対面（男女, 男男）及び友人同士（男女, 男男）雑談」から抽出した。具体的には、友人関係にある中国人上級日本語学習者と日本語母語話者による8組（女性同士5組, 男性同士3組）の自然談話である。データの概要を表1に示す。

表1 分析資料とした談話データの概要

| 会話の通し番号 | 発話者の組み合わせ | 会話時間 | 発話文数 |
|---------|--------------|---------|------|
| 22-324 | CFA006-JF176 | 約 35 分 | 390 |
| 22-325 | CFA007-JF177 | 約 29 分 | 643 |
| 22-326 | CFA008-JF178 | 約 26 分 | 502 |
| 22-327 | CFA009-JF179 | 約 23 分 | 259 |
| 22-328 | CFA010-JF180 | 約 27 分 | 468 |
| 27-442 | CMA001-JM128 | 約 17 分 | 324 |
| 27-443 | CMA003-JM129 | 約 20 分 | 510 |
| 27-444 | CMA005-JM113 | 約 18 分 | 578 |
| 合計 | 8 組 | 約 195 分 | 3674 |

本研究では、「第三者ほめ」の認定及び抽出を、古川（2000, 2002）による定義と分類に基づいて行った。

4. 結果と考察

分析資料から 17 の「第三者ほめ」が含まれる談話が抽出された。そのうち、「ほめ合い」が見られたのは 5 つであり、いずれも中国人日本語学習者（以下、学習者）の「第三者ほめ」に日本語母語話者（以下、母語話者）が同調してほめ合うものであった。このことから、初対面か友人関係かという共通の背景知識の多寡にかかわらず、学習者は接触場面において第三者に関する「ほめ合い」を成立させる傾向が低いことがうかがえる。以下においては、「ほめ合い」の成立及び不成立の談話例を示しながら、学習者と母語話者がそれぞれどのように「第三者ほめ」の談話を展開させているかを分析する。また、なぜそのような談話展開が見られるのかについて、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論における「フェイス」の観点から考察する。

談話 1 は女性の友人同士の雑談における「ほめ合い」が不成立の談話例である。

【談話 1】 学習者 CFA006-母語話者 JF176

| | | |
|------|--------|---|
| 1 | JF176 | でもさ、中国、モンゴル、私は中国は行ったことあるけど、モンゴル、 |
| 2 | CFA006 | ええー、どこどこ??どこに行ったの?。 |
| 3 | JF176 | 中国の北京と(はい)上海。 |
| 4 | CFA006 | いつ??最近いつ?。 |
| 5 | JF176 | えっと、年末と、この前の年末とあと…えーっと、 |
| 6 | CFA006 | 友達がいる?。 |
| 7 | CFA006 | 3年ぐらい前…。 |
| 8 | JF176 | お姉ちゃんが住んでで(はい)、北京に住んで(はい)たのね、もう日本に帰ってきたんだけど、それで遊びに(はい)行ったりしてたけど。 |
| 9 | CFA006 | どんな感じですか<笑い>。 |
| → 10 | JF176 | でもねあの日本、(はい)お姉ちゃんの旦那さんは日本の会社で(はい)駐在で行っているから(はい)、すごいいい生活してたよ、すごい(はい)あのいいマンションに住ん、(はい)セキュリティーがすごいしっかりした外国人(はい)がいっぱい住んでいるようなマンションに住んで【I。 |
| 11 | CFA006 | 】日本の方ですか?↑。 |
| 12 | JF176 | うんうん、そうそうそう。 |

| | | |
|----|--------|--|
| 13 | JF176 | それで(はい)、そうあの子供も 2 人いて小さい、あかちゃんだから、(はい)「アイ」がいて。 |
| 14 | CFA006 | はいあ。 |
| 15 | JF176 | そうすごい、で日本に帰ってきて、すごい大変がっている。 |

1 行目（以下、L1）から L8 にかけて、過去の中国ツアーについて、CFA006 の情報要求に応える形で JF176 が情報提供を行っている。そして、L9 の「どんな感じですか」という情報要求に対して、JF176 は L10 で「いい」、「しっかりした」にさらに「すごく」を付加して、自分の家族が北京で快適な暮らしを送っていたことを紹介している。古川 (2000, 2002) の定義を参照すると、この発話は「第三者ほめ」のうち、③「話し手に関わるもの」への「ほめ」とみなすことができる。そのような「第三者ほめ」に対して、CFA006 は JF176 の発話が完結しないうちに L11 で「日本の方ですか?」という確認・情報要求の発話を行っている。それに対する答えが L12 で与えられた後、L13 と L15 で帰国後の育児面での大変さという話題に移っている。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論によれば、人間には他者から認められたい、高く評価されたいというポジティブ・フェイスがある。談話 1 では、「ほめ」の対象が母語話者 (JF176) の親族であるため、そこでの「第三者ほめ」に学習者 (CFA006) が同調してほめ合うことで JF176 のポジティブ・フェイスが満たされ、連帯感の強化につながると考えられる。そのような機会がここでは CFA006 によって看過されていると言えよう。

談話 2 は女性の友人同士の雑談から抽出された「ほめ合い」が成立している談話例である。

【談話 2】 学習者 CFA010-母語話者 JF180

| | | |
|---|--------|---|
| 1 | CFA010 | どんな質問が出たらと聞いたら、グループ面接だから(うんうん)、例えば、5 人のグループが一緒に設問に答えてもらう(うん)。 |
| 2 | CFA010 | 全部一緒にみたいな感じで、質問の 1 つは例えば、‘あなたは自分を 1 つのものとしてたとえたら、自分はどんなものですか’って聞かれたの。 |
| 3 | CFA010 | 「JF180 苗字」さんは、「JF180 苗字」さん、自分はどんなものですか?< |

| | | |
|------|--------|--|
| | | 笑い。 |
| 4 | JF180 | え、それは難しいじゃん?。 |
| 5 | JF180 | ものってどういうこと?。 |
| 6 | JF180 | 例えば、もの、食べ物?。 |
| 7 | CFA010 | 何でもいい。 |
| 8 | JF180 | 何でもいいの?。 |
| 9 | JF180 | なんだろう、どういうふうに答えたらい、分からない。 |
| … | 中略 | |
| 10 | CFA010 | でもう1人、一緒のグループだから、もう1人の男の子が自分は水と言いました。 |
| 11 | CFA010 | 私は水だから、水はどこでも、どんな生物にしても欠けることはできない…欠けないものであります。 |
| 12 | CFA010 | だから水はいろんな形態があります(うん)、固体もあるし、何か、 |
| 13 | JF180 | 液体もある。 |
| → 14 | CFA010 | そうそうそう、すごくうまく言いました。 |
| 15 | JF180 | そうねー、 <u>これはいい答えだね</u> 。 |
| 16 | JF180 | <u>うまいなあって感じる、何か</u> 。 |
| 17 | CFA010 | だから「JF180 苗字」は?。 |

L1 から L3 にかけて、CFA010 は知り合いが面接で受けた質問を JF180 にしている。それを受けて JF180 は L4 で「難しいじゃん」、L9 で「わからない」といったように当該の質問が難しいという反応を示している。それに対して、CFA010 は L10 から L12 にかけて、同じグループの別の応募者が自分のことを水に例えた例を挙げ、そのような答えに対して「すごくうまく言いました」と古川 (2000, 2002) による分類の②「話し手と聞き手に関わらない」第三者をほめている。

そのような「第三者ほめ」に対して JF180 は L15 で、「そうねー」と反応して CFA010 の「第三者ほめ」に賛成する立場を示すとともに、それに続けて「これはいい答えだね」と発話している。さらに、L16 で「うまいなあって感じる、何か」と「第三者ほめ」を繰り返している。このように、CFA010 が導入した「第三者ほめ」に JF180 も同調することで、CFA010 の評価が肯定され、ポジティブ・フェイスが満たされるとともに、両者が同じ感覚や価値観の持ち主であることが共有されている。

談話 1 と談話 2 は、同じく女性同士の談話であるが、談話 1 では「ほめ合い」が成立していないのに対して、

談話 2 では成立していることから、学習者と母語話者とは「第三者ほめ」が行われた後の展開の仕方に違いがあることがわかる。母語話者は、相手のポジティブ・フェイスに敏感であり、価値観の一致を表明して協調的な談話の構築を重視する一方、学習者にはそのような働きかけが見られない。

談話 3 は男性の友人同士の雑談に見られた「ほめ合い」が不成立の談話例である。

【談話 3】学習者 CMA005-母語話者 JM113

| | | |
|------|--------|--|
| 1 | JM113 | =なんか、《少し間》来年??、《少し間》から、僕は世知辛い、生活に入るの。 |
| 2 | CMA005 | はーはーはー。 |
| 3 | JM113 | なんか、気付(あー)いたんですよ。 |
| 4 | JM113 | 昨日‘きのう’人と話しな、き、あの、昨日‘きのう’なんか、経産省の人とかと飲んでたんですけど、 |
| 5 | CMA005 | はいはいはい。 |
| 6 | CMA005 | <いいですね>{<。} |
| → 7 | JM113 | <経産省>{>}手取りって 30 万あるらしいっすね。 |
| 8 | CMA005 | 30 万しかないんですか?[→]。 |
| → 9 | JM113 | [大声で]いや 30 万、なかなかありますよ。 |
| 10 | CMA005 | 官僚だよ?[↑]。 |
| → 11 | JM113 | 《沈黙 1 秒》え、い、あ僕と同期なにん、《少し間》2 年目とかですよ。 |
| 12 | CMA005 | 官僚だよ?[↑]。 |
| 13 | CMA005 | 《少し間》めちゃくちゃ忙しいですよ。 |
| 14 | JM113 | 《沈黙 1 秒》まあ、そうですね。 |
| 15 | JM113 | あの一、くま、時間でも、時間で>{<,, |
| 16 | CMA005 | <30 万しか>{>}もらえないんくすよ>{<。} |
| 17 | JM113 | <時>{>}間で割るとまあ 500 円切るらしいんですけど。 |
| 18 | CMA005 | うーん。 |
| 19 | CMA005 | 《少し間》これん、年‘ねん’に、に、2,000 万以上もらわないと、割に合わないんじゃないですか?[→][すか、が小声で]。 |
| 20 | JM113 | いやー、でも#####、学士院とかひどいですよ。 |

- | | | |
|----|--------|----------------------------|
| 21 | CMA005 | まあ、官僚とか、完全にやりがいさ ーす、 |
| 22 | JM113 | 《少し間》ふははははく笑い。 |
| 23 | CMA005 | あの一、搾取ですね、あれは。 |
| 24 | JM113 | すー[息の音]、《沈黙 1 秒》いやー。 |
| 25 | JM113 | でもそれから考えると僕らもそう じゃないすか。 |

談話 3 では、来年社会人になることに対して金銭面で不安を感じる JM113 が L4 で前日に経済産業省の知り合いと飲んだことを紹介し、L7 で「手取りって 30 万あるらしいっすね」とその知り合い (③「話し手に関わるもの」) の給与が高いことをほめている。それに対して CMA005 は L8 で、「30 万しかないんですか?」と「しか」を用いて自分が考える公務員の給与には達していないことを強調し、JM113 が行った「第三者ほめ」に対して不一致の立場を示している。それを受けて JM113 は L9 で、大きな声で「いや」と否定し、直後に「なかなかありますよ」と「なかなか」や「よ」を用いて、自らが行った「第三者ほめ」を強化している。さらに、CMA005 の「官僚だよ?」という上昇イントネーションを用いた反論の後、1 秒の沈黙が生じて、JM113 は L11 で話題の人物が就職して 2 年目であることを補足説明することで「ほめ」に値することを伝えている。しかし、CMA005 は JM113 による「連続ほめ」に同調することなく、L12 と L13 で「官僚だよ?」、「めちゃくちゃ忙しいですよ」と反論を繰り返している。その後、1 秒の沈黙が生じて、JM113 は L14 で「まあ、そうですね」、L15 と L17 で「時間で割ると 500 円切るらしいですけど」と述べ、CMA005 の主張に歩み寄っている。

日中接触談話においては、永田 (2016) で指摘される初対面場面だけでなく、友人同士の会話においても「第三者ほめ」に関する「ほめ合い」を成立させる発話が学習者には見られないことがわかった。さらに、友人同士の会話では、上に見たように、「対立関係」を明示するような発話が学習者には見られた。これには友人関係という心理的な距離感の近さが関わる可能性がある。また、「第三者ほめ」から「対立」へと談話が展開された談話 3 においては、談話 1 よりも、母語話者による沈黙が顕著に多い。これは「ほめ合い」の不成立によって、母語話者が予想していた談話展開が頓挫してしまったためであり、母語話者には「第三者ほめ」が会話の場に提出された際には「ほめ合い」が期待されていることが示唆される。

談話 4 は談話 3 と同じ発話者の組み合わせであるが、「ほめ合い」が見られた談話例である。

【談話 4】学習者 CMA005-母語話者 JM113

- | | | |
|------|--------|---|
| 1 | CMA005 | あれ??、『アメトーーク』って一、 《少し間》あの一、《沈黙 2 秒》雨 上がり決死隊の。 |
| 2 | JM113 | 宮迫が出てくきましたよ{<} |
| 3 | CMA005 | <そうそう>{>} |
| 4 | JM113 | 今年じんないとも、たかのりでし (あ)、陣内智則でしたっけ。 |
| 5 | CMA005 | なるほどね。 |
| 6 | CMA005 | なるほどね。 |
| → 7 | CMA005 | 陣内は、陣内は、安定的に面白いん ですけれども。 |
| 8 | JM113 | 《少し間》いや、MC 微妙ですよ。 |
| 9 | CMA005 | MC 微妙すか。 |
| 10 | JM113 | 陣内が、陣内はやっぱ‘やっぱり’ いじられたほうがいいですよ。 |
| 11 | JM113 | <離婚騒動>{<},, |
| 12 | CMA005 | <はへ>{>}。 |
| 13 | JM113 | とかあるんで。 |
| → 14 | CMA005 | 陣内割と好きです、安定的に面白い から。 |
| 15 | JM113 | <u>ま、1 人‘ひとり’でよくやるなと 思いますね。</u> |
| 16 | CMA005 | そうですね。 |
| 17 | CMA005 | 劇団ひトりはあんまり、《少し間》 おもしろく‘面白く’ないんですけれ ども。 |

談話 4 では、『アメトーーク』というテレビ番組に芸能人 (陣内智則) が出演したことが JM113 によって言及されている (L4)。それを受けて、CMA005 は「なるほどね」を 2 度繰り返して、L7 で「安定的に面白い」とほめている。しかし、この「第三者ほめ」に対して、JM113 は L8 で少し時間をおいて「いや、MC 微妙ですよ」と否定的に述べるとともに、L10、L11 と L13 でなぜそのように思うかの理由を挙げている。一方、CMA005 は L14 で「安定的に面白い」の前に「割と好き」を先行させながら、自分の好きな芸能人、つまり、③「話し手に関わるもの」への「ほめ」を繰り返している。そのような「連続ほめ」を受けて、JM113 は L15 で「ま」や「と思う」を使って自分の意見を和らげながらも「よくやるな」と肯定的に評価している。これによ

り、第三者に関する「ほめ合い」が成立している。

談話3で見た学習者の展開とは対照的に、談話4で母語話者は自らの意見とは異なることを表明しつつも、最終的に学習者の「第三者ほめ」に同調して「ほめ合い」を行っている。この点に関しては永田(2014)の指摘と一致している。金(2012)では、母語話者による「対者ほめ」が見られる談話においては、話者が相互に相手のフェイスを優先しており、母語話者の特徴は「聞き手優先」であると述べられている。本研究で明らかになった「第三者ほめ」をめぐる「ほめ合い」の形成も、このような「聞き手」(相手)を優先する意識が働いているものと考えられる。

5. おわりに

本研究では、日中接触場面の友人同士の自然談話について、日本語母語話者と比較しながら、中国人日本語学習者の「第三者ほめ」の使用実態を分析した。

その結果、初対面の関係(永田, 2016)と同様に、友人関係においても、日本語母語話者は「ほめ合い」を行うのに対して、中国人日本語学習者は行わないという使用実態が確認された。また、談話展開に着目すると、友人関係では、日本語母語話者は「第三者ほめ」に対立しても最終的には相手のフェイスを優先して「ほめ合い」を行っている。一方、中国人日本語学習者は「第三者ほめ」から対立の展開に至ることもあることが明らかになった。これをふまえると、今後の日本語教育では、中国人日本語学習者に対して、第三者をほめ合うことで連帯感の構築・強化や談話展開の促進につながるということを理解させておくことも必要であろう。

本研究では友人同士の日中接触場面における「第三者ほめ」の使用実態が明らかになったが、分析資料とした談話においては「第三者ほめ」が見られることが少なかった。今後は、より多くの談話例を収集して分析を行うことで、本研究で得られた結論の妥当性を検証することが求められる。

参考文献

- 宇佐美まゆみ監修(2023)『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』, 科研基盤研究(A)「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的な研究」(研究代表者: 宇佐美まゆみ) 及び, 国立国語研究所, 機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明」
- 金庚芬(2012)『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房
- Kusumawati, M (2023)「インドネシア語と日本語の初対面会話における第三者「ほめ」一本連鎖のパターンと機能に着目して」『ニダバ』52, 79-96.
- 永田良太(2014)「談話のトピック展開から見た「ほめ」」『表現研究』99, 30-39.
- 永田良太(2016)「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」—中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として—」『語文と教育』30, 139-150.
- 古川由理子(2000)「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』10, 117-130.
- 古川由理子(2002)「「ほめ」の種類—受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に—」『日本語・日本文化研究』12, 41-54.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universal in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Holmes, J. (1986). Compliments and compliment responses in New Zealand English. *Anthropological linguistics*, 485-508.
- Holmes, J. (1988). Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of pragmatics*, 12(4), 445-465.
- Wolfson, N. (1983). An empirically based analysis of complimenting in American English. *Sociolinguistics and language acquisition*, 443, 82-95.